



〈再〉スタート、 対面授業

法学部座談会 2022年8月5日開催

〈再〉スタート、対面授業

昨年度・一昨年度と、多くの授業がオンラインで実施されてきましたが、この春より、発話をともなわない授業では教室収容人数の3分の2までの学生の受講が可能となり、大教室の講義科目でも対面授業が増えました。

今回は、コロナ禍前の大学生活を知る最後の現役世代となった法学部の4年生の皆さんにお集まりいただき、対面授業が再開された今、思うこと、考えることなどを、それぞれの経験からざっくりばらんにお話しいただきました。

なお、久々の対面での開催となった座談会に際しては、感染対策を徹底し、ソーシャルディスタンスを充分にとって実施しております。



オンライン授業の メリット・デメリット

加藤 皆さんは、コロナ禍前と後の授業を体験していますが、今どのように学生生活を過ごしているか、どのような態度で授業に臨んでいるのかということを、お話しいただければと思います。

竹ヶ原 今は就活しているので、ゼミと中国語だけをとってもどちらも対面授業です。3年の時はほとんどオンライン授業だったのですが、好きな時間に見られるっていうのは、正直、楽だったかなと思います。ただ、対面だからこそ一時間半に集中して、メリハリをつけて学習できるので、メリット・デメリットどちらもあるかなと感じています。

畠嶋 2年生の頃は語学をとっていたので、わりと早い時期から対面授業は復活していました。法学部の講義で対面が始まったのは3年の前期からちょっとずつで、今は全部対面です。以前は対面1コマ受けるためだけに、片道一時間半かけて大学へ来ることもあったので、オンラインって便利だなあと正直思いました。

大沼 1年生の頃は全部対面でしたが、2年では全部オンラインでした。3年の時はゼミだけ対面で大学に来るという感じです。オンラインの授業で、いつでも何回でも好きなだけ見ら

れるというのは、(コロナ禍の) 生活にフィットしていたのかなと思います。逆に、対面授業の時にあったような、聞き漏らしたら終わる、みたいな緊張感がなくなって多少だらけた部分はあったかもしれません。

池森 「緊張感」については、私もそうだなと感じていますが、オンデマンド動画の場合、「巻き戻せる」というのが有難いなと思いました。聞き逃した部分などをその場で再確認して、自分の頭の中で整理しながら進めていくというのは、対面授業よりも理解しやすいなと感じていました。

加藤 反面、対面授業だと、わからなかったところをその場で友達同士で相談したりもできますよね。1年生でいきなりオンライン授業に放り込まれて孤立したり、精神的に体調を崩したりする学生さんもいたようです。ノートの貸し借りとか、そういった対面でのコミュニケーションが失われることについてはいかがでしょう?

池森 交友関係の面ではデメリットを感じています。1年生の頃はすべて対面だったので、周りの子に話しかけたりして友達を増やしていくんですけど、その友達とは、オンラインになってからは連絡をとることもなくなっていました。

竹ヶ原 対面授業の時は授業の合間に友達とどうでもいい話とかをしていて、それは大学生

◎参加学生

池森 由唯 さん

法律学科4年(菅原寧格ゼミ所属)

大沼 疾風 さん

法律学科4年(井上陸ゼミ所属)

竹ヶ原 綾乃 さん

法律学科4年(千葉華月ゼミ所属)

畠嶋 ゆか さん

法律学科4年(千葉華月ゼミ所属)

◎司会

加藤 祐介 先生





ならではの楽しみだったなど、今にして思います。オンラインになっても元々仲が良かった人とは連絡とると思うんですけど、大学って、たとえば週に一度とか浅い付き合いの人との交流も大事で、そういう場が失われたこともデメリットですね。

加藤 コロナになって失われたのは「雑談」かも知れませんね。

対面とオンライン、履修の際の悩み

加藤 対面授業とオンライン授業、履修する際に選ぶ基準とかありましたか？

畠嶋 この曜日はオンラインだけの日、この曜日は対面だけの日というようにしていました。同じ日に、オンラインと対面の連絡だけは避けたかったので。

加藤 大学もPC等の設備を使えるようにしたり、いろいろしていますが、それについては？

畠嶋 Wi-Fiが開放されている教室では、マスク着用必須なので、(リアルタイムの)オンライン授業でも顔出しができず残念でした。発話を認められている教室でも、周りに人がいるとちょっと声は出しにくいなと。

竹ヶ原 私は、対面・オンライン関係なく、とりたい授業を先に選んでいました。ただ、大学に来る機会が少ないため通学定期を買わなかつたので、一回ごとの通学にお金がかかるんですね。なので、オンラインだととっていたかもしれないけれど、対面なのでとのを諦めたという授業もありました。

池森 4年生になって、履修登録の段階ではどの授業がオンラインでどの授業が対面かというのはわかりませんでした。履修登録ギリギリまで「状況に応じて変える」という先生がほとんどでしたので、迷いました。

畠嶋 2年生の時はフランス語は原則対面だったので、その日はそのためだけに出てきました。3年の時はフランス語をとったなかったので、とりたい講義の周りの講義を見て対面かオンラインかを決めていました。

加藤 教員としてはなるべく対面でやった方がいいと思っているのでギリギリまで状況を見て判断するのですが、学生側としては、授業形態が途中で変わるのは不便だという意見は受け止めておきたいと思います。

大沼 僕も2、3年はほぼオンラインでした。親が介護の仕事をしているので、コロナ感染に対してシビアで、オンラインだと安心して受けられ

大沼疾風さん

池森由唯さん

竹ヶ原綾乃さん

畠嶋ゆかさん

るなと思いました。

畠嶋 家でオンライン授業受けていると、本当に勉強やっているのかと親に言われたり、学費出してもらっているのに実際の大学行けなくて気まずい気持ちになりましたね。

失われた縦のつながり

加藤 上下のつながりはどうですか？ 先輩や後輩との繋がり、サークルなどは？

竹ヶ原 一年の頃は先輩によくしてもらいました。オンラインになってます後輩が入ってこない。入ってくれてもなかなか交流ができません。

加藤 関係が切斷されますよね。先輩から期末試験の過去問を教えてもらったりすることになりますしね。オンライン授業が続いていると、大学ごとのカラーや大学文化が途絶えてしまうという心配もあります。

畠嶋 私は放送研究会なんですが、下の代が二人しか入らない。もっと勧誘しておけばよかったです。下とのつながりがなくなりました。

池森 ジャズ研究会はそれまでは他大学とも学園祭を通じて、つながりがありましたし、他の大学を知る機会もありました。それが失われましたね。

加藤 授業以外のキャンパスライフの醍醐味、大学の役割が失われているのは、かわいそうだと思います。周りの友人に啓発されることなんかも本来はあると思うんですけどもね。

池森 私たちは、1年の時は対面だったのでつながりはあると思うんですけど、3年生以下はオンラインばかりで、交流の意欲がわかないというはあるのかな。

後輩たちへ、 諦めずにつながる努力を

加藤 今後、対面授業が原則となっていくますが、皆さんが今後、国や大学に望むことはありますか？ またある意味、皆さんは「コロナ禍前の大学文化の継承者」なわけですけれど、今後、3年生以下に伝えたい大学の魅力、大学生活を送る上でのアドバイスとか、皆さんだ

からこそ言えることがあると思うので、ぜひ。

池森 後輩に言いたいこととしては、講義だと大学の先生に話しかけづらいですが、ゼミに入ると、その人となりがわかります。相談事とか、気軽に聞いていいんじゃないかな。大学に怖い先生いないよって伝えたいです。

竹ヶ原 一年生の頃は、授業どるにあたって先輩に色々聞いていたタイプでした。そういうコミュニケーションは大事だし、怖がらずに先輩とかにも聞いてほしいなと思います。

大沼 本分は勉強かもしれないけど、大学生の意義ってなんだと思ったら、キャンパスライフじゃないかと思います。時間とお金をかけてわざわざ大学に来て、友達とご飯食べて、といったそういう些細な日常パートみたいな部分が大学生としての実感を持たせてくれたのかなと感じます。今は難しいと思いますけど、後輩諸君には諦めずに、どこかとつながる努力というか、意地というかそういうのを持ってくれればもっと充実した大学生活が送れると思います。

竹ヶ原 対面だったら勝手に友達できるかって言ったら、実はそんなこともなくて、私もずっと一人だったんですけど、ガイダンスの時に頑張って声かけて友達になりました。対面には対面の大変さもあります。もちろんオンラインだから大変なこともあるけど、自分たちはオンラインだから友達ができないんだとは思わず、現状を嘆かずに、今できることを取り組むのが大事かなって思いました。

畠嶋 大学への要望になるんですが、雑談する場がほしいです。サークル文化棟で過ごす何でもない時間、何でもない場を、できるだけ早く開放してほしいなと思います。あとコロナ後の対面講義では、みんな私語もなく静かで真面目になったなというのが、ちょっと寂しくもあり……。

竹ヶ原 私たちが一年生の時は、うるさくて怒鳴られてたりしましたもんね。

加藤 なるほど、授業のワイワイガヤガヤ感ってのは失われたかもしれませんね。本日は貴重なお話をありがとうございました。

法政大学との 単位互換プログラム 参加学生手記

法学部では2020年度より、法政大学法学部との授業の単位互換をともなう学生交流(国内留学)を行っています。期間は半年または1年間です。ここでは、本学から法政大学へ派遣された4名の学生の手記をご紹介いたします。この制度について興味を持たれた方は、ぜひ今後のプログラムへの参加をご検討ください。

西濱りおん

(半年間派遣)

政治学科3年

実際に半年間法政大学で学ぶことによって、北海学園大学では学べないことを学べた。法政大学は政治、法律どちらも学べることがかなり多く、幅も広い。北海学園大学にはない講義がかなりあって、自分が興味を持っていた分野について学ぶことができた。本当に自分が学びたいことが学べる環境とはこういうことなのだと肌で感じることができた。

また、有給の長期インターンシップも行った。北海道では民間企業に長期インターン生という

形で関わることができないので、かなり勉強になった。短い時間だったが、そこで成長したことや吸収したことを今後の就活に活かしていくと思う。

勉強の面でも就活の面でも、さすが東京という感じで、発展具合を感じた。



土井 悠太

(通年派遣)

法律学科3年

私は法政大学で民法の授業を中心に履修していました。法政大学と北海学園では民法のカリキュラムが異なり合計単位数は同じ20単位ですが(違ったらごめんなさい)、法政は2単位刻みでありその分授業数が多いためテストも多かったなという印象でした。また、学んだことのある科目も複数履修していましたが、抽象的で難しい内容が多く、学園でしっかり基礎を学んだからようやく授業内容が理解できたということが多かった印象です。恐らく他の科目も似たような形になるのではないかと思います。私の授業の選び方もあるとは思いますが、生徒同士の意見交換が活発な授業も多く、自分の考えたことや疑問に思ったこと掲示板に載せ、それを教授や生徒が返信するといったものがありました。なお、学園にはない科目も多く、デザイナーベビーを巡る法律関係や、イギリスなど一部の国では

実際に行われているミトコンドリア置換法を日本で認めるべきかなどを検討する法と遺伝学など法律の知識を用いて答えのない問題を扱う科目はとても勉強になり面白かったです。

授業形態としては対面が多い印象がありますが、履修者が多い場合は学園と同様にオンライン授業となっていました。オンライン授業ではzoomのリアルタイム配信が多かったです。また対面授業では、多くの生徒がパソコンやタブレットをつかいメモを取っており、コピーしたレジュメにメモをしていた私はこれが都会か、と驚きました。

私は法政大学で民法や消費者法を中心に扱うゼミに参加しています。こちらのゼミでは春学期(前期)の場合、教授の選んだ事例について毎週問題作成班と回答班に分かれて、前者が出した問題を後者が授業までに解き、当日は討

論しあうといったものになります。ゼミの内容自体もとも面白いですが、授業前日にzoomを用いあらかじめ論点などについて話し合うサブゼミを行うことや、1つの問題に複数の視点からいくつもの回答を用意してくるなど、授業に意欲的な生徒が多く私も置いて行かれないように頑張るのでとても勉強になり、楽しいです。



半沢 萌

(通年派遣)

法律学科3年

法政大学では主に自分の学科である法律学科の授業をメインに受講しており、興味のある刑法ゼミに参加しています。ゼミでは過去の文献をグループで分担し、要約し発表をしつつ、現在の刑法の観点にどのように関連しているかなどを話しています。北海学園大学でのゼミも文献の要約をすることが多かったため、大事な部分を要約するという力を身につけつつあるな、と実感しています。また、法政大学では生徒自らが考え、学ぶということがとても大事であるように思います。もちろん北海学園大学でも同じですが、自分の興味のあることに関してより深く、自分が学んできたことを含めて学びを発展させていくことがとても多いな、と授業を受けていてとても感じています。コロナ禍でオンライン授業が多かったです、法政大学では対面授業がメインで、基本的に学校に登校し

授業を受けています。先生によって全く授業形態が違うので、それについていくのは大変ですが、授業内容自体がとても楽しいので、予習や課題もなんとかこなせています。また、知り合いがない中、一人で授業を受けるのは大変な面もありますが、ゼミの友達と一緒に受けれる時もあるのでとても楽しいです。

課外活動としては、北海道にいる時と同じカフェでアルバイトをしているのですが、一年しか働けないことを許可してくださる店舗を探すのは大変でしたが、基本的に週3程度でシフトに入っています。授業の予習や課題などがある際は予定が詰まり気味になり、試験期間は正直大変でした。アルバイト先には同じ法政大学の学生の方がいたり、学生が多いのでとても良い環境で勉強とアルバイトができるな、と日々感じています。コロナもあり、なかなか出かけ

たりなどはできないですが、学業とアルバイトと、とても充実した学生生活を東京で一年過ごすことができるので、とても貴重な経験をさせていただいているな、と感じています。

就活などは時間があまりなく予定が合わなかつたりと進んでいないのですが、自分を知る時間が増え、今後の就活に役に立つ自己分析に繋がるなど感じています。



川生 彩

(通年派遣)

法律学科4年

法政大学への派遣参加には人それぞれ、何通りものメリットがあるかと思います。もちろんこれまでと違った環境に身を置き幅広い学習が叶うところが大きな魅力といえますが、私が今年度プログラムへの参加を決めたのは、正直なところこの制度に本旨とされた利用法があると考えたためです。

既に東京での就職を決意していた私にとって、このプログラムが始まったことは思いがけず訪れたチャンスでした。特に一足先に社会人生活のイメージを掴むことができる点が大変魅力的でした。実際物価や賃金の感覚が嫌と言うほどわかりますし、私はそもそも一人暮らし始めたので、自らの課題点も痛感できています。派遣前は引っ越し代がかかりることや家賃分支が増えることが気がかりでしたが、1年間アルバイトを増やすれば当面の分は工面することができ

ました。

4年進級時には卒業要件を満たしており、就職活動に専念、引っ越ししてから始めたアルバイトに週5日出勤していたこともあって前期はほとんど学業から遠のいてしまっていました。前向きに捉えると、気持ちを切り替えて就職活動に臨むことで余裕を持って希望業界の内定を獲得することができた、と言い換えることができるでしょうか。後期は興味のある講義や資格試験の勉強に時間を割ければと思います。

リモートでのインターンや面接が定着した今、北海道に住みながらでも就職活動は十分可能です。しかし、面接が対面とリモートの二択である場合だと、面接の交通費が支給されない場合など考えると、東京に居ることが有利に働くこともあると考えます。また、法政大学の方からキャリアセンターの利用も勧めてくださいました（私

は利用しませんでしたが）ので、関東での就職を考えているなら派遣参加によって就職活動に不都合が生じることはないと考えます。

勉強はもちろんですが就職活動ほかの活動についても利点があるのなら、"ついで"で参加するのも大いにあります。

研究室訪問



東京2020大会からその先へ

内藤 貴司

運が転がってきた

法学部の皆さんには人文・社会科学領域のため、馴染みは薄いかもしれません、私の研究分野は「運動生理学」です。簡単に述べますと、1回もしくは継続的な運動によって身体がどのように応答（変化）するのかを調べ、生体の機能を明らかにする学問です。生体の機能といつても取り扱うものは様々あり、呼吸循環・筋・内分泌（ホルモン）・脳機能などがあります。その中で、私は体温調節機能を専門とし、修士課程時代から「暑さ（暑熱）対策の方略の検討」を行っています。研究を行っていく中で、「トップアスリートの一助となる」を一つの目標として考えていました。漠然とした目標でしたが、最も酷暑下が想定された東京2020大会の開催が決定した2013年9月8日に、これは目標達成があり得るかもしれないと強く感じたのを感じています。大学院修了後、競技力向上の中核拠点である国立スポーツ科学センター（前職）に着任した際は更に現実感を感じました

オフシーズンを失った

暑熱対策に関する研究には、「旬」があります。例年、梅雨が明ける7月の海の日前後から残暑が残る9月中旬まで。屋外や競技現場をフィールドとした研究は、この旬でしかできま

せん。具体的には、暑熱に加えた日光による輻射熱の検討がこれに該当します。お盆休みや帰省なども関係ありません。この2ヶ月間の中には、ゲリラ豪雨、線状降水帯や台風などの悪天候がランダムで起こり、準備を重ねたにもかかわらず当日中止で被験者へ頭を下げるところが含まれています。それを回避すべく、この時期は自身の携帯にダウンロードした多くの天気予報アプリと睨めっこしています。幸い、ここ数年は「晴れ男」のようで自身の予報が当たり、実験全体が中止には至っておりませんが、バカンスに出かけたかのように日焼けします。

旬は夏ともう一つ、冬にあります。冬ではラボベースで実験室を加温し、実験を行います。夏や秋では季節馴化（暑い中で生活をしていると暑さに馴れる）の要因が含まれ、これは個人差が大きいため基礎研究は冬にしなければなりません。真冬に暖かい部屋で実験できるのを羨む人もいるかもしれません、間違いです。実験部屋は35°Cまで加温し、閉め切っています。COVID-19の影響で検者（測定を行う人）はマスクに加えて、フェイスシールド・ガウン・手袋を着用しながら、内容にもよりますが2時間程度行います。実験終了後に部屋を出るとサウナから出るような感覚になります。どちらの実験も検者ですら大変な中、被験者には更に運動を課しています。文句も言わずに行ってくれる被験者には頭が上がりません。大変感謝しております。

身体冷却とテニス

専門領域を更に細分化すると「暑熱対策としての身体冷却法方略の検討」を行っています。上記の実験で得られたデータから身体冷却法の最適解を検討しています。テニス競技はオリンピック種目の中で最も長時間酷暑に暴露される種目であることから、2017年度からオリンピックへ向けてテニス競技に特化した身体冷却法方略を①ラボベースの基礎研究、②基礎研究

の結果を競技現場でプロ選手へ応用了した実践研究、③メガイベント（全豪オープン）でのサポート体制の課題と戦略の検討から行ってきました。これらの検討から日本代表テニス選手へ万全の体制を準備し、目標に向かって邁進していましたが、COVID-19による無観客試合、トップ選手からのクレームによる試合時間の移行（11時開催から15時開催へ）でサポート体制の多くは直前での変更を余儀無くされました。事前合宿を含め4週間の帯同となりましたが、国の代表として名誉のかかったトップアスリートに対して自身が創出した知見を説明し、活用してもらいました。目標の最中は良い時間でした。

無形のレガシー

日本では、運動生理学は東京オリンピック1964大会前後から目覚ましい発展を遂げ、今日の競技現場におけるスポーツ医・科学を支えています。東京2020大会を終えた後、スポーツ庁は第3期スポーツ基本計画において東京2020大会のレガシーと成り得そうなものを記載しています。その壮大なレガシーを私が担うこととはできませんが、東京2020大会に関わった運動生理学を専門とする一般体育の大学教員として、東京2020大会でのサポートを単なる体験談として伝えるのではなく、そこに至るまでのスポーツ科学の知見や身体知、ひいては目標（夢）を達成する素晴らしい学生と考えていただいたらと思います。

（法学部講師：健康とスポーツの科学担当）



ごちやごちやこそが、スッキリしている？

堀内 匠

どの国の交通マナーが「悪い」のか

外国を訪問すると、交通マナーの違いに驚きませんか。ロンドンでは車が通る道を誰もが勝手に横断するし、一方のドライバーも当たり前のように路上駐車をしています。それと、ラウンダバウトというロータリーがやたらに多く、慣れないと大変。また、モロッコの首都ラバトではワインカーを出すよりクラクションを鳴らす頻度が高く、運転席側にミラーがついていない車が多く走っていました。ところがそんな国々でも、人々は混乱を感じてはいません。

どうも、それぞれの国で街並みや交通事情に応じて適した交通マナーは異なっていそうです。例えば日本では車を買おうと思ったら車庫証明を警察に届け出ねばならず、すべての自動車には「置き場所」が確保されています。それに対して路上駐車の国々の事情からすると、ヨーロッパの古い街並みでは駐車場を設けるスペースはありません。駐車場のために街を壊すというのは非現実的です。建物の新陳代謝と路上駐車の有無は関わっているのかも。車が横断者に対して必ず道を譲るのは、車の方も横断者がどこから出てくるかわからないという前提で運転しているからである。ラウンダバウトは馬車の文化の名残で、馬車は停止や発進が苦手ですから、なるべく止まらずに済むような工夫でつくられたものだったそうです。

一方で日本の道路を見てみると、白線が多くて、車道と歩道が整然と分離されているので車道を横断する者がいるなんて想定せずに車は走っていますが、かわりに歩行者より全般的に自動車のほうが優位になります。それから目につくのはガードレールの多さ。昭和30年代の交通戦争と呼ばれた時代に、子どもたちを守るために設置が進んだのがガードレール。しかし白いレールは美観を損ねるし、安全策というとすぐにガードレールに頼る面があるようと思えます。日本という国は、「できない」ようにすることで「安心」を得るしくみといいましょうか。「やらないに違いない」という他者への信頼とは根本的に違う仕組みが形作られている。

ルールが先かマナーが先か

面白いことにこうしたマナーとか人々の行動様式の多様性に比べると、ルール（規則）にはそこまで大きな差はないのです。モロッコでも車線変更にはワインカーを出さねばなりませんし、ロンドンでも路上駐車はダメ。日本だって歩行者の横断のほうが車より優先です。でも、どれもあまり守られていないルールでもある。二重構造が存在しています。

公共政策というのは、ルール=法律や条例をつくることが最終的な目的だと思われることがあります。しかし、いまご紹介したような各国の交通マナーの様子をみると、案外そうでもないよう思えてきます。要は生活のなかで最適化されるのがルールであって、ローカル・ルールはときに法律を超えて人々に受け入れられています。こういう場合、無理に法を押し付けるかえって混乱が生じるケースもあります。

みずからおさめれば、 おのずからおさまる

ここでヒントになるのが、自治の原理です。「みずからおさめる」と「おのずからおさまる」、

どちらとも読めるのが「自治」。市民からすると「みずからおさめる」ことこそが理想だと思われるのですが、為政者の側からすると「おのずからおさまる」のが至上と考えられてきました。江戸時代がそうであったように、領民たちが政治などに关心を持つことなく、淡々と年貢を納めてくれるのが良いわけで、そのためには、藩は集落がつくる村極めに余計な介入をしてはならないと考えられていたそうです。

ところが明治に入ると天皇を中心とした中央集権型の国家体系がつくられるとともに、国の政策を全国に浸透させる必要が出てきます。それで天皇を頂点に都道府県から市町村へ、そして町内会自治会を通じて家庭や個人まで連なるピラミッド型の構造が構築されていく、自治は「一寸茲でベルを押せば、ずうつと隅まで響きが応ずる如く、陛下の思召がずっと隅から隅まで及んで居る。これは全く自治制度のお陰であると思ふ」（床次竹二郎）という具合に利用された。もちろんこんなものは国家的な「忖度」のシステムそのもの。ですが、いま民主主義の社会においても、地域が自ら考え行動しやすいようにすることが結局は望ましい秩序、ある種の均衡を導くというのは、冒頭の交通マナーの例からも言えるものでしょう。ならば、そのとき政府はどうあるべきか、政府とどう向き合うべきか。

現代社会は巨大な都市装置に満ちていて、それを利用する我々は公共的課題に関わらずに生活することはできません。ですから私達は政治に関わらねばなりません。そうして政府と上手に付き合いながら「みずからおさめる」ことが、機能する政策を構築することへ繋がり、結果的にすっきり「おのずからおさまる」ことにつながっていくはず。だからマナーなんて地域ごと違って当たり前。交通ルールの多様性も、奥深い公共性の姿の一端。ごちやごちやで、良いんです。



たかだ よしひろ

高田喜博 さん

(公益社団法人 北海道国際交流・
協力総合センター(HIECC(ハイエック)客員研究員)

—本日ご紹介するのは、ハイエック(HIECC)の客員研究員をお勤めの高田さんです。よろしくお願ひします。

よろしくお願ひします。

—1957年のお生まれということで、同窓生の中でもかなり先輩ですね。ぜひ学生時代のことをお聞かせください。

学生時代は、ゼミの仲間と遊んでばかりでしたが、3年生のころから法律の勉強が面白くなって、4年生から司法試験受験を始めました。しかし当時はもちろん法科大学院もなく、当時の学園大の合格者もごく少数(2名程度)でした。結局合格できなかっただけで、必死に勉強したことは、その後の仕事に大いに役立っています。

—現在は、どのようなお仕事をされておりますか?

司法試験には合格できなかったのですが、法学部に大学院ができたので、その一期生になりました。当時は修士課程しかなかったので、その後どうしようかと考えていたら、かつて6号館の1階にあった社団法人北太平洋地域研究センター(NORPAC)に就職して研究員になり、国際学術交流の仕事に就きました。その後、NORPACは道庁別館にある公益社団法人北海道国際交流・協力総合センター(HIECC)に吸収されて、研究員となりました。ここでは、北海道を取り巻く国際情勢に関連した調査研究や一般道民向けに国際情勢に関するセミナーを企画し、コーディネーターなどを務めております。また、道内企業の海外(中国やロシア)進出、ボーダーツーリズムを活用した地域づくりなども手掛けております。最近は、北方領

土問題でテレビ(めざまし8、みんテレ等)に出演することがあります。

—素晴らしいご経験ですね…。それではここで、後輩へのメッセージをお聞きしたいのですが、いかがでしょうか。

世界も日本も北海道も、複雑だった社会がより複雑となり、より不透明となっております。そんな中で生きていくためには、自分の頭で状況を分析して、答えをひねり出す能力が必要です。そこで、ゼミなどで真剣な議論を繰り返すことで、そうした能力を身につけてもらいたいと思います。

また、仕事をする上でネットワークは重要です。学園の先輩、同輩、後輩と仲良くして、自分で納得できる良い仕事をしてほしいです。学園には、「ゆうほう会」という同窓会があります。コロナ禍では対面での活動が難しくなっておりますが、例年ビアパーティーなどを行って親睦を深めてきました。学生さんも、卒業後は、こうした同窓生のネットワークを、大いに活用していただきたいですね。

—とても興味深いお話を聞くことができました。
ありがとうございます!

《次号に続く》
(構成:岡本直貴)

新任教員のご紹介

津田 久美子 先生



はじめまして。法学部3年次開講科目「国際公共政策」を担当します。大学生のころから一貫してグローバル化と国際政策に关心を寄せてきました。歴史ある北海学園で、みなさまとともに学ぶ日々に心を躍らせています。どうぞよろしくお願いいたします。

中央大学総合政策学部国際政策文化学科卒業。北海道大学法学研究科博士後期課程単位取得退学。日本IBM株式会社営業職、日本学術振興会(特別研究員DC1、若手研究者海外挑戦プログラム派遣)、横浜市立大学都市社会文化研究科非常勤講師、などを経て現職。